

自ら社会の形成に関わろうとする生徒の育成（2年次／3年計画）**～ エージェンシーの育成に着目して ～**

奥田 陽介 進藤 秀俊 米山 卓

1. はじめに

ロシアがウクライナへの侵攻を続けている。核兵器の使用を示唆し、敵対国への圧力を高めている。G7 諸国やNATO諸国は、経済封鎖網を敷き、ロシアを追い詰めようとしている。似たような歴史を社会科教育では教えてきた。それでも「歴史は繰り返す」のか。私の教え子たちは、この状況をどのように捉えているのだろうか。私たち教師は、目の前にいる生徒に何を伝えればよいのだろうか。

世界で唯一の戦争被爆国である日本では、「核の共有」についての議論が必要だという発言が一部政治家からあった。社会科教育ではこの問題をどう扱うべきだろうか。本校で使用している帝国書院発行の歴史教科書では、冷戦期をこえて 21 世紀は「新しい戦争」に直面しているという趣旨の記載がある。それは間違いではないと思うが、ロシアという国連安保理常任理事国によるウクライナ侵攻が現実になっている“21 世紀”を正しく説明するには不十分のような気がする。

VUCA（Volatility：変動性、Uncertainty：不確実性、Complexity：複雑性、Ambiguity：曖昧性）の時代と言われてから久しい。文字通り、生徒たちが生きる世界は、変化が激しく、あらゆるものを取り巻く環境が複雑性を増し、想定外の事象が発生する将来予測が困難な状態にあるといえる。そのような世界で、「グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者」（文部科学省 2017、p.23）として生きるためにはどのような資質・能力が必要なのか。中学校の社会科学習を通して、生徒に育むべき資質・能力は何か。生徒たちが「よりよい社会と幸福な人生の創り手」（文部科学省 2017、p.3）となれるよう、それを明確にし、授業実践と結びつけたい。

2. 研究主題設定の背景**（1）これまでの研究の経緯**

本校では、学習指導要領の改訂にあわせて、「社会科を通して生徒に育むべき資質・能力」を明確にして、その育成のための授業実践のあり方について考えようとした。

平成 29 年度から平成 31 年度までの 3 年間は、研究主題を「社会の形成者としての資質・能力を育む授業の創造～社会科における『見方・考え方』を働かせた学びを通して～」とし、社会科で育成を目指す資質・能力として、「社会の形成者としての資質・能力」（表 1）を定義するとともに、それを育成するための手立てとして「見方・考え方を働かせた学び」や「資質・能力を見取るための評価の工夫」について研究を行った。

表 1 本校で考えた「社会の形成者としての資質・能力」

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・ 社会で見られる（た）様々な事象や課題等に関することを理解するとともに、課題解決に向けて諸資料から様々な情報を調べ、既知の事象と関連付けたり、まとめたりすることができる。・ 社会における諸課題について、他者の考えに触れながら多面的・多角的に考察し、その解決に向けて考え、新たな価値を創造し、周囲と議論すること。また、様々な方法で表現することができる。・ よりよい社会の実現のために、新たな課題を見出したり、他者の考えも参考にしながら、自分に何ができるのかを判断していこうとしたりすることができる。 |
|---|

令和 2 年度から令和 3 年度までの 2 年間は、研究主題を「社会における諸課題に向き合い、主体的に解決しようとする生徒の育成～『主体的な学び』の実現を目指して～」とし、前研究の「社会の形成者としての資質・能力」の定義を引き継ぎながら、本校生徒の実態や「主体的に」社会に関わってほしいという本校職員の願いを踏まえ、「自ら課題を見出す」、「社会に見られる課題を自分事として捉え、その解決に主体的に関わる」

ために必要な資質・能力を育成することを重視した授業実践のあり方について研究を行った。具体的には、本校全体研究で提案された「主体的な学び」のプロセスモデルを生かした単元づくりや「主体的に学習に取り組む態度」の評価の工夫について実践を通して考えを深めた。

5年間の研究を通して、「資質・能力」に着目した授業実践を重ねてきた。それらの実践を通して、明らかにになったことを本校では次のようにまとめた。(表2)

表2 5年間の研究のまとめ

・本校で育成を目指してきた「社会の形成者としての資質・能力」とは、学習指導要領の目標で示されている「公民としての資質・能力の基礎」にあたること。 ・社会科の3分野における「見方・考え方」は、各分野固有のものではなく、それぞれの分野の学習において単独で、または組み合わせて活用できるものである。 ・「主体的な学び」を実現するうえでポイントとなるのは、生徒のエンゲージメントを高めるための教材（問い）を工夫することである。また、前の単元における生徒の学びを生かす形で、問いを生み出すことが大切である。 ・パフォーマンス課題に取り組ませる際は、ルーブリックなどの評価の作成・提示の方法を工夫する必要がある。 ・「学び方」は学習されるので、3年間を見通して、学習の計画を立て、教師の介入の度合いを調整すべきである。 ・生徒の振り返りに適宜コメントを行うことで、生徒による学びの調整を促すことができる。

(2) 全体研究を踏まえて

本校全体研究では、本年度より「新たな価値を創造する生徒の育成～『主体的な学び』のプロセスモデルを生かした実践を通して～」との研究主題を掲げ、「創造性」の育成を目指している。本校の考える「創造性」とは、「自ら課題を見出し、その課題に関わる事象について自分なりに新たな意味や考え方を見出すことで解決する資質・能力」である。これを資質・能力の3つの柱で整理すると、次の通りになる。(表3)

表3 「創造性」の整理

3つの柱	本校の考える創造性
知識及び技能	課題の解決に必要な知識及び技能
思考力、判断力、表現力等	自ら見出した課題の解決に向かって、新しい知見や技術革新を取り入れながら、これまでに得た知識や経験を結びつけ、新たな意味や考え方を見出す思考力、判断力、表現力
学びに向かう力、人間性等	自ら課題を見出し、その解決に主体的に取り組もうとする態度

本校社会科においては、この「創造性」を「自分たちが生きる社会について自ら課題を見出し、その解決を目指して、関連する社会の有様について考察したり、社会の在り方について選択・判断したりする資質・能力」であると捉える。課題の解決には、関連する社会的事象について、これまでの学習内容や新しく集めた知識、社会における新たな知見や技術革新などをもとに多面的・多角的に考察し、自らの認識を深めることやその深まった認識に基づいて、これからの社会の在り方について選択・判断することが必要になる。考察や選択・判断を行う時に発揮される資質・能力が「自ら見出した課題の解決に向かって、新しい知見や技術革新を取り入れながら、これまでに得た知識や経験を結びつけ、新たな意味や考え方を見出す思考力、判断力、表現力」であると考え。そして、考察や選択・判断の結果として得られた「自分にとっての社会的事象の新しい意味」や「自分なりの社会に関する考え」「課題の解決」が新たな価値であると考え。

(3) 生徒の実態

2022 年度 6 月に 1、3 年生（合計 233 名）を対象にアンケート調査を行った。本アンケートでは、本校全体で実施した「学びについて調査」（詳細は本校全体総論参照）で課題として挙げられていた「学習自体に楽しさを感じる内的調整の得点が、他の動機づけ得点よりも低いこと」が、社会科の学習においてはどのような実態にあるのかを把握するために、また本校で育成を目指してきた「社会の形成者としての資質・能力」のうち、テスト結果や学習活動への取り組み状況からだけでは把握が難しかった「よりよい社会の実現のために、新たな課題を見出したり、他者の考えも参考にしながら自分に何ができるのかを判断していこうとしたりする」態度が生徒に育まれているかどうかを見取るために必要と考えられる質問を設定した。質問項目は以下の通りである。

質問（１）各分野について、将来どのように役立つと考えるか。（選択式・複数回答可）

- 選択肢 ①進学・就職するための試験で正答できる。
②自分の興味・関心・知的欲求を満たせる。
③自分の生きる国や社会について理解できる。
④社会の一員として、国や社会の方向性を決められる。
⑤社会の一員として、どのような国や社会をつくるべきか考えられる。
⑥社会の一員として、社会生活を送ることができる。
⑦どのように役立つかわからない。

質問（２）質問（１）の選択肢を選んだ理由は何か。（以下、すべて記述式）

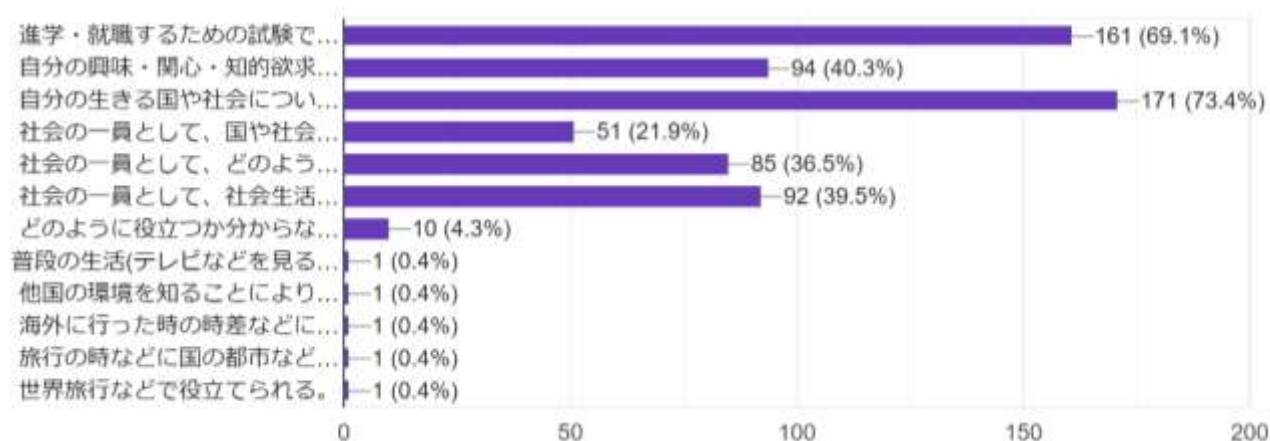
質問（３）各分野の授業について、面白いと感じる時はどのような時か。

質問（４）社会科の授業が役に立ったと感じた経験はあるか。

質問（１）については、次のような結果となった。（左側の項目の順番は、上記選択肢①～⑦の順番と一致している。また、「その他」として記述されたものが表示されているため、選択肢①～⑦以外の項目も記載されている。）

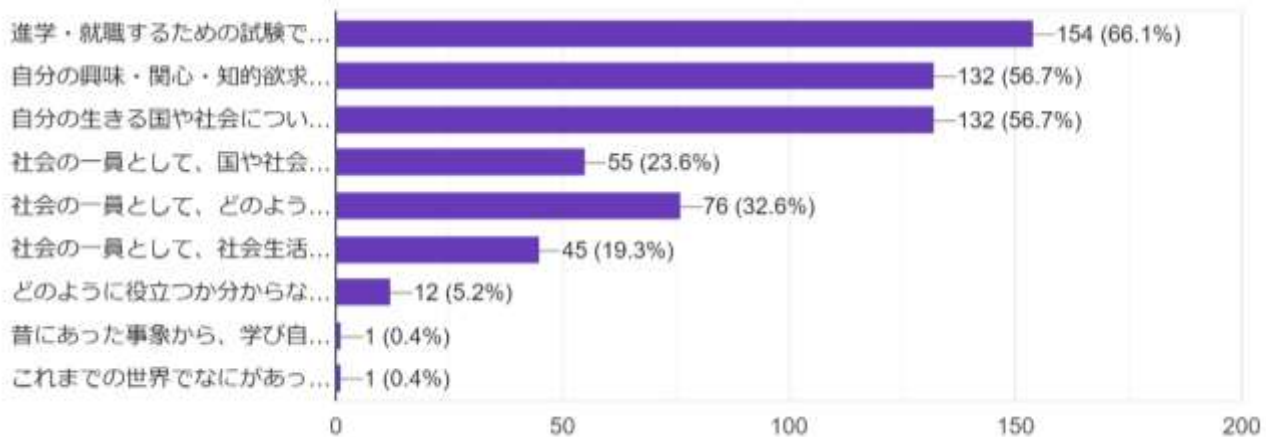
地理の授業は、将来どのように役立つと思いますか？（複数回答可）

233 件の回答



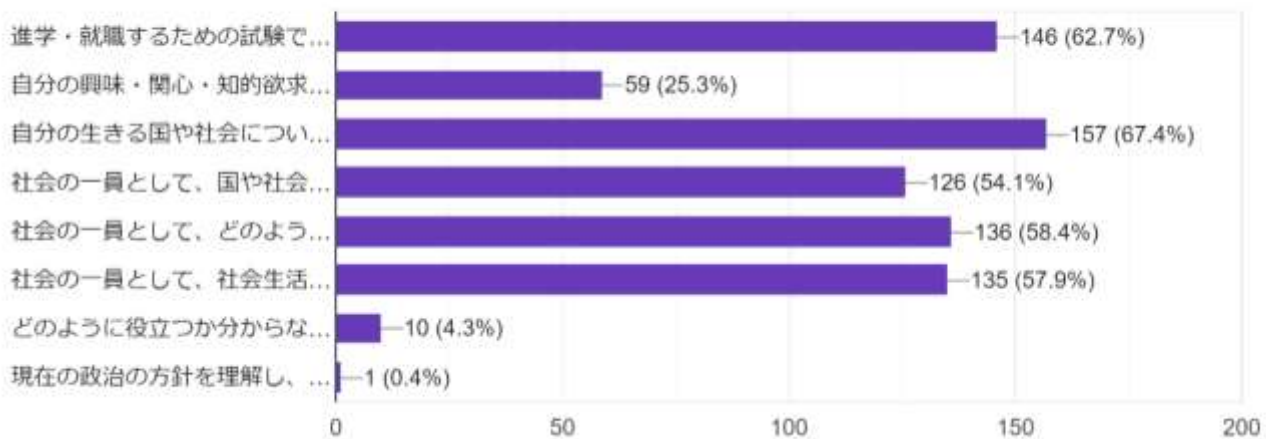
歴史の授業は、将来どのように役立つと思いますか？(複数回答可)

233 件の回答



公民の授業は、将来どのように役立つと思いますか？(複数回答可)

233 件の回答

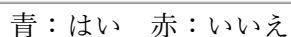


傾向としては、どの分野についても、「進学・就職するための試験で正答できる。」「自分の生きる国や社会について理解できる。」の回答数が多い。歴史的分野については、「自分の興味・関心・知的欲求を満たせる。」が比較的多い回答数となっているが、地理的分野と公民的分野はそれほど多くない。「よりよい社会の実現のために、新たな課題を見出したり、他者の考えも参考にしながら自分に何ができるのかを判断していこうとしたりする」態度に関係する「社会の一員として、国や社会の方向性を決められる。」「社会の一員として、どのような国や社会をつくるべきか考えられる。」「社会の一員として、社会生活を送ることができる。」については、公民的分野では半数以上の生徒が選択しているが、地理的分野と歴史的分野では選択している生徒は多くない。どの分野においても「どのように役立つかわからない。」を選択した生徒がいた。

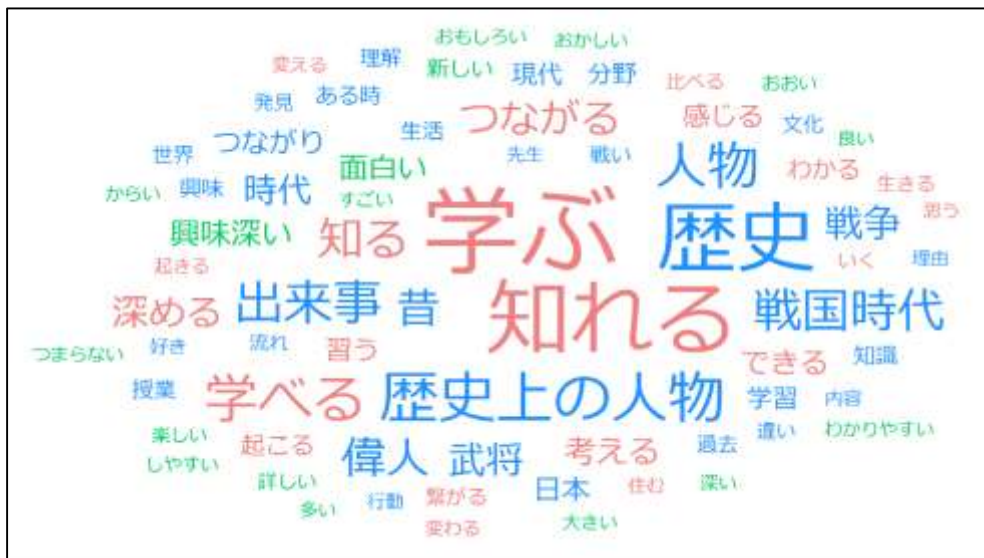
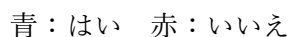
そうした傾向と質問（２）に対する回答内容とを併せて考えると、生徒たちはテストでよい点を取りたいという考えから社会科の学習に取り組んでいる側面があるといえる。また、社会科の学習の目的を自分の生きる国や社会を「理解する」ことであると認識している生徒が多いと考えられる。また、分野によって違いはあるが、「学習自体に楽しさを感じている」とは言い難い実態があると考えられる。さらに、「よりよい社会の実現のために、新たな課題を見出したり、他者の考えも参考にしながら自分に何ができるのかを判断していこうとしたりする」態度について、学習したことと現在の社会の有り様や在り方を結びつけていることが見取れる記述がなかった。

質問（３）については、次のような結果となった。（生徒が記述した回答については、AI テキストマイニングツールを活用した解析の結果を掲載している。）

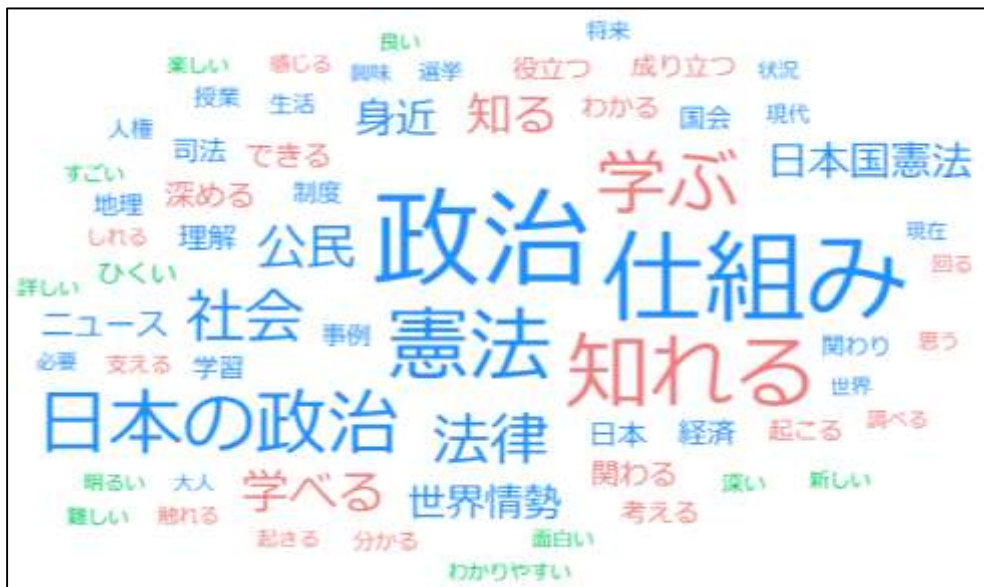
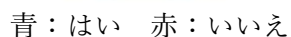
《地理的分野》



《歷史的分野》



《公民的分野》



3分野に共通していえることは、「知れる」という記述が多い点である。生徒にとって、社会科の学習における「面白さ」は、「知ること」が中心になっていると考えられる。公民的分野については、「いいえ」を選択した

質問（４）については、次のような結果となった。（生徒が記述した回答については、AI テキストマイニングツールを活用した解析の結果を掲載している。）

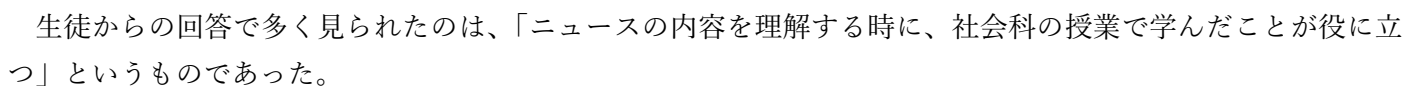
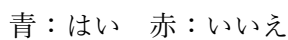


表4 本校生徒の実態

- ・社会科を自分たちの生きる国や社会を「理解する」ための学習であると捉えている。
- ・生徒たちにとって「理解する」とは、個別の社会的事象を知識として理解して覚えることを意味しているのではなく、見方・考え方を働かせて、社会的事象を関連させながら捉えて理解することを意味していると考えられる。
- ・社会科を進学や就職のための試験でよい結果を出すための学習であると捉えている面もある。
- ・多くの生徒にとって、社会科の学習で得たものと現在の社会を結び付ける場面は、「ニュース」を理解する時だけになっていることがほとんどのである。
- ・学習内容自体に楽しさを感じる場面は限定的であるといえる。

(1) 課題意識と願い

また、「社会の形成者としての資質・能力を育む授業の創造」や「社会における諸課題に向き合い、主体的に解決しようとする生徒の育成」を研究主題に掲げて授業実践に取り組んできた本校社会科としては、中学校を卒業した後こそが大切だと考えている。生徒たちが社会で生きる中で、人によって関わり方は多様だとして

も、何らかの形で「自らの社会をよりよい方向へ変えていこうとするプロセス」に関わってほしいという願いをもっている。

そこで本校社会科では、これまでの研究成果を踏まえつつ、令和6年度までの研究主題を「自ら社会の形成に関わろうとする生徒の育成」とし、授業実践を中心としながら研究を進めていきたい。

(2) エージェンシー

「自ら社会の形成に関わろうとする生徒」の姿をより明確にするために、「エージェンシー」という概念に着目したい。「エージェンシー」とは、OECD Education2030 プロジェクトから提唱された概念で、社会の一員として、よりよい社会を目指して「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力」と定義される。「行為主体性」などと訳され、単なる主体性ではなく、アクティブな側面をいっそう強調したものである。(猪瀬、2022)

白井(2020)は、「エージェンシーには、社会の一員として、社会がより良くなるように考え、行動していくという責任があるということが含意されている。」と説明している。また、「エージェンシーとは、単に個々人がやりたいことをやることではなく、むしろ、他者との相互のかかわり合いの中で、意思決定や行動を決めるものである。」とも述べている。また、エージェンシーは、様々な文脈において発揮されるものであるとして、リードビーターの挙げた4つの文脈を引用しながら、その中でも注目すべきものとして「市民としてのエージェンシー」を挙げている。「市民としてのエージェンシー」とは、「単に市民として、自分たちの権利や責任について理解しているということだけではなく、それを前提にして、社会の構成員の一人として、どのように社会を担っていくかということである。」

OECD が提唱した経緯を踏まれば、「エージェンシー」は本来学校の教育活動のすべて、または家庭、地域社会も含めたあらゆる場面における教育活動の中で育まれるものであると考えられる。「自ら社会の形成に関わろうとする生徒」の育成という視点、学習指導要領等で示されている「社会科という教科が目指しているもの」という視点から考えると、本校社会科としては、「市民としてのエージェンシー」のうち、「社会の形成者の一人として、社会をどのように見ることができるのか、社会をよりよいものとするために何を変えるべきか、またそれはどうすれば可能になるのかを学び、考える」という側面に着目をして「自ら社会の形成に関わろうとする生徒」の資質・能力をより明確にするとともに、その資質・能力を育成する場面において、どのような学習が有効か考えていきたい。

(3) 自ら社会の形成に関わろうとする生徒

「市民としてのエージェンシー」のうち、「社会の構成員の一人として、社会をどのように見ることができるのか、社会をよりよいものとするために何を変えるべきか、またそれはどうすれば可能になるのかを学び、考える」という側面に着目をして、これまで本校で育成を目指してきた資質・能力、これまでの研究の成果等を生かして、「自ら社会の形成に関わろうとする生徒」の資質・能力の具体を次のように定義したい。(表5)

表5 「自ら社会の形成に関わろうとする生徒」の資質・能力

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・社会に見られる課題を把握したり、よりよい社会の実現のために、新たな課題を見出したりして、それらの課題に関することについて多面的・多角的に考察して理解することができる。また、それらの課題の解決に向けて、諸資料から様々な情報を調べ、既知の事象と関連付けたり、まとめたりして、選択・判断することができる。・社会に見られる課題について吟味し、真に課題と捉えるべきものかどうか考え、判断することができる。また、よりよい社会の実現のために、自らの生きる社会について考察し、新たな課題を見出すことができる。・自らの考えを適切に表現したり、考察を深め、よりよい選択・判断をするために他者と積極的に議論したりすることができる。 |
|---|

「自ら社会の形成に関わろうとする生徒」の資質・能力を学習の過程に沿って図示すると、図1のようになる。

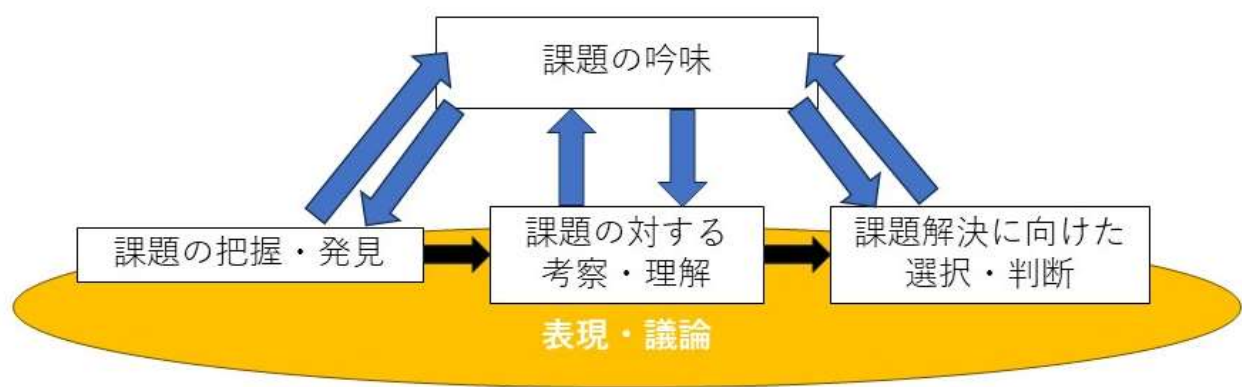


図1 「自ら社会の形成に関わろうとする生徒」の資質・能力

4. 研究の内容

「エージェンシー」の概念に基づいて考える時、「自らの社会の形成に関わろうとする生徒」を育成するためには、その資質・能力（表5）を発揮することが必要な学習場面を設定することが必要であると考えた。そこで、その学習場面として、「社会を『自分事』として捉え、切実感をもって自ら学び考える学習」、「社会の一員として、社会に見られる課題、より良い社会の実現のための新たな課題について考察したり、選択・判断したりする学習」を仕組むこととした。

(1) 1年次の研究

①「主体的な学び」のプロセスモデルを生かした単元の構成

i) 取り組み内容

生徒が自らの学びを振り返り、調整するプロセスである「『主体的な学び』のプロセスモデル」を生かした単元を構成した。全体研究も踏まえ、とくに「目標設定」、「方略計画」、「振り返り」、「全体の振り返り」を重視した。各学習過程においてどのような工夫をしたか次の表にまとめた。（表6）

表6 「主体的な学び」のプロセスモデルを生かした単元構成における指導の工夫

学習過程	具体的な工夫
目標設定	・ 生徒が自ら課題を見出せるよう、多様な資料を提示する。 ・ 見方・考え方を働かせることができるよう、視点や考え方についてアドバイスをを行う。
方略計画	・ 単元を貫く問いを設定し、その解決のために必要な情報や思考をゴールとして設定させる。
振り返り	・ 毎時間、または数時間に1回、単元を貫く問いの解決にどれくらい近づくことができたのか、自ら設定した「ゴール」の達成状況などを振り返らせる。
全体の振り返り	・ 単元の学習を通して、「努力し続けたこと」や「単元を貫く問いを解決するために工夫したこと」などをについて振り返らせる。 ・ 自ら設定した「ゴール」の達成状況とともに、「ゴール」の妥当性について検証させる。

ii) 成果と課題

上記のような工夫を重ねることで、生徒各自がそれぞれ異なった視点をもって授業に臨むようになり、「主体的な学び」として学習に取り組むことができるようになった。また、同じ枠組みを活用した単元構成で学習す

ることを重ねるうちに、生徒自身が「主体的な学び」のプロセスモデルを意識して学習に取り組むようになったことが、「全体の振り返り」の記述などから読み取ることができた。

一方で、「ゴール」がうまく設定できなかったり、「ゴール」に対する自らの達成状況を把握することが難しかったりする生徒も一定数いた。また、「ゴール」の設定や振り返りができていても、それ以上質が向上しないという課題も見られた。

②現在の社会に見られる社会的事象を教材化

i) 取り組み内容

現在の社会に見られる社会的事象を教材化することで、「社会に見られる課題」や「よりよい社会の実現のために、新たな課題を見出すこと」への意識を高めることができると考えた。また、そうした教材を生かした学習を行うことで、中学校を卒業した後、実際に社会において生き、「社会の形成に関わろうとする」時に、より有効な資質・能力を育むことができると考えた。

地理的分野では「地球的課題や SDG s」など、歴史的分野では「歴史的事象を現在の社会でどのように扱うか」など、公民的分野では「現代社会に見られる課題」などを教材化することを想定した。

ii) 成果と課題

どの分野の学習においても、「現在の社会」に見られる社会的事象を教材として扱うことで、生徒は「自分事」として学習に取り組むようになった。授業中の生徒の様子から、学習内容について知ったり、考えたりすることに価値を感じる生徒が多かったようである。

地理的分野や公民的分野では比較的教材化がしやすかった。一方で、歴史的分野は難しい点があった。メタヒストリー学習の考え方を取り入れた方法には大きな可能性を感じた。

(2) 2年次の研究

1年次の成果を生かしつつ、残された課題を克服するためには、「学習方略の明確化と共有」、「自らの考えを表現する場面の重視」がポイントになると考える。

①学習方略の明確化と共有

2年次には、「主体的な学び」のプロセスモデルにおける「学習方略」を生徒との対話の中で、明確にしたい。また、明確にした「学習方略」をクラス単位で共有したい。その際に、それぞれの「学習方略」を活用する目的や場面についても整理したい。

本校社会科では、「主体的な学び」のプロセスを「生徒が、社会的事象を自分事として捉え、切実感をもって学習する過程」と一致すると考えてきた。その学習過程において、生徒が自ら設定した「単元を貫く問い」の解決に向かって主体的に学習を進めるためには、生徒自らが「学習方略」を選び取って、試行錯誤しながら学習に取り組むことが必要になる。これは将来的には「社会的事象への向き合い方」になると考える。生徒はこれまで社会科の学習、または他の教科の学習の中で、「学習方略」を無自覚に、または教師主導の授業展開の中で活用し、身につけてきたと考える。それらを「生徒の言葉」で、「自分自身の学習方略」として明確にすることで、生徒は自覚的に「学習方略」を活用できるようになり、これまで以上に主体的な学びが実現され、生徒のエージェンシーが高まると考える。

これは、中学校卒業後の学びにもつながるものである。自ら学びを深める学習過程において、自分のもっている「学習方略」をさらに広げたり、質を高めたりして、新たな「学習方略」を見出し、よりよい学びを実現できるようになると考える。

なお、これは全体研究2年次の研究内容の一つとして掲げられている『『主体的な学び』のプロセスモデルにおける『学習方略』を言語化し、生徒と共有すること』と同じことを指している。

「学習方略」を明確にする過程では、生徒との対話を大切にしたい。なぜなら、「学習方略」を生徒の実感を伴うものとするため、「生徒の主体性」を大切にしたいからだ。また、生徒の発達段階（主に学年の違い）や学習集団（主にクラスの違い）などによって、生徒と共に明確化し、共有する「学習方略」の分類や内容、表現には違いがあり、3年間を通して身につけさせるものであるといえる。

「学習方略」を生徒の学びや気づきを生かしながら、生徒との対話の中で明確にするためには、教師の中で「主体的な学び」のプロセスモデルにおける「学習方略」を整理しておかなければならない。上で述べたとおり、社会科の学習における「学習方略」は、「社会的事象への向き合い方」になると考えている。また、本校社会科では「エージェンシー」の概念に着目して、「自ら社会の形成に関わろうとする生徒の育成」を目指している。それらのことを踏まえると、生徒に「どのように社会を分からせたいか」を明確にし、その実現につながる「学習方略」を想定しなければならないと考える。

本校社会科では、「制度としての社会（＝国家）」と「人々の営みによって形成される社会（＝市民社会）」の両側面に着目させ、現状の「社会」の有り様を捉えさせるとともに、これからの「社会」の在り方はどのようにあるべきかを「自分に関わること（＝自分事）」として考えさせたい。この考えをもとに、これまでの実践や共同研究者、研究協力員の助言を踏まえ、次のとおり「学習方略」の例を考えた。（表7）ただし、これらはあくまで“例”であり、生徒とともに学びを深める中で、さらに広がったり、深まったりするものであると考える。

表7 「主体的な学び」のプロセスにおける社会科の「学習方略」の例

学習を広げるための学習方略	学習を深めるための学習方略
・自分がこれまで学習してきたことを参照する。 ・教科書や資料集、用語集、地図帳等信頼性の高い資料を読む。 ・課題に関連のありそうな書籍を読む。 ・新聞を読む。 ・課題に関連のありそうなインターネットサイトを読む。 ・他者の学習の様子を参照する。 ・情報や自分の考えを図や表を使って整理する。 ・自分の意見を他者に伝える。 ・他者の意見を聞いたり、取り入れたりする。 ・他者と話し合い、意見を練り上げる。	・複数の視点に着目する。 ・複数の側面について説明する。 ・課題に関連のありそうなデータや写真、動画を集め、そこから情報を読み取ったり、読み取った情報を比較したりする。 ・自らの主張を、根拠付けるデータを探す。 ・課題に関連のありそうなデータを比べる。 ・地図で位置を確認したり、周囲に何が位置しているか見たりする。 ・時間軸で並べる。 ・現在の社会とのつながりを考える。 ・自分の生活や地域とのつながりを考える。 ・社会的なまとまりに着目したり、システムとして捉えてみたりする。 ・人々の価値観に着目する。 ・人々の交流や社会的事象のプロセスに着目する。

②自らの考えを表現する場面の重視

2年次は、毎時間の授業や単元の学習の要所で、生徒が「自らの考えを表現する場面」を積極的・意図的に設定したい。その中で、「表現」を生徒から引き出す方法についても実践を重ねたい。

「エージェンシー」の概念から考えると、「自ら社会の形成に関わろうとする生徒」とは何らかの形で社会との接続があるはずである。本校社会科では、生徒と社会をつなぐものは「自らの考えの表現」と考えている。そのため、「自ら社会の形成に関わろうとする生徒」の資質・能力として、「自らの考えを適切に表現したり、考察を深め、よりよい選択・判断をするために他者と積極的に議論したりすることができる。」を挙げている。何らかの形で「自らの考えの表現」がなされなければ、社会について考えることも、伝えることも、行

動することもできないからだ。

社会の一員として、社会に見られる課題、より良い社会の実現のための新たな課題について考察したり、選択・判断したりすることも、自らの考えとして表現しようとする時に初めて整理され、明確化される。また、人間は言語を使って考察したり、選択・判断したりしているのだから、その過程そのものが「自らの考えを表現」することと一致しているとも考えられる。

つまり、「自らの考えを表現する場面」を積極的に設定し、重視することは、「社会の一員として、社会に見られる課題、より良い社会の実現のための新たな課題について考察したり、選択・判断したりする学習」や「把握したり、見出したりした課題が真に課題と考えられるのかを吟味する学習」の場面を設定することになる。また、生徒の表現した考えを評価材として、「自らの社会の形成に関わろうとする生徒」の資質・能力が育まれたかを見取ることもできると考える。どのような見取りができるのか、どのような評価基準で評価すべきかについても実践の中で考えたい。

5. 研究の計画

1 年次	・「自ら社会の形成に関わろうとする生徒」の資質・能力を明らかにする。また、それらの資質・能力を育む方法について、授業実践を通して考え、明らかにする。
2 年次 (本年度)	・1 年次の研究成果を踏まえ、「自ら社会の形成に関わろうとする生徒」の資質・能力を育む授業のあり方について、「学び方」「自らの考えの表現」をポイントとして考え、明らかにする。 ・「自ら社会の形成に関わろうとする生徒」の資質・能力を見取る評価の在り方について、授業実践を通して考え、明らかにする。
3 年次	・1、2 年次の研究成果を整理し、「自ら社会の形成に関わろうとする生徒」を育むための授業のあり方についてまとめる。

6. 引用・参考文献

- ・文部科学省. 学習指導要領総則 解説. 東山書房、2018 年、p 3、38、53.
- ・文部科学省. 学習指導要領社会 解説. 東洋館出版、2018 年、237 p.
- ・澤井洋介・唐木清志編著. 小中社会科の授業づくり. 東洋館出版社、2021 年、270 p.
- ・小玉重夫. “主権者教育を推進していくうえでの課題”. 文部科学省. 2019-09-17. https://www.mext.go.jp/content/1421971_03.pdf (参照 2022-06-12)
- ・内閣府. “平成 25 年度子ども・若者白書”. 内閣府ホームページ. 2013-06. https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h25honpen/b2_02_02.html (参照 2022-06-12)
- ・杉浦真理. シティズンシップ教育のすすめ——市民を育てる社会科・公民科授業論. 法律文化社、2013 年、195 p.
- ・小玉重夫. シティズンシップの教育思想. 白澤社、2003 年、181 p.
- ・川端裕介. 見方・考え方を働かせる課題設定 & 評価スキル 60. 明治図書出版、2022 年、151 p.
- ・渡部竜也・井手口泰典. 社会科授業づくりの理論と方法. 明治図書出版、2020 年、228 p.
- ・藤原孝章. 日本におけるシティズンシップ教育の可能性. 同志社女子大学 学術研究年報、2008 年、p 59、89-106.
- ・白井俊. OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来—エージェンシー、資質・能力とカリキュラム—. ミネルヴァ書房、2020 年、258 p.
- ・猪瀬武則. 中間報告書「経済的見方・考え方を働かせた心温かいエージェンシーの育成をはかる経済教育内容開発」. 日本体育大学、2022 年、p 12-31.
- ・唐木清志. 「公民的資質」とは何か—社会科の過去・現在・未来を探る—. 東洋館出版社、2016 年、166 p.
- ・木村明憲. 自己調整学習 主体的な学習者を育む方法と実践. 明治図書、2023 年、187p.